

学校における生徒の居場所作りについて

著者	高柳 真人
著者別名	Takayanagi Masato
雑誌名	研究紀要
号	38
ページ	99-104
発行年	2000-12-26
URL	http://hdl.handle.net/2241/9092

学校における生徒の居場所作りについて

農業科 高柳真人

1. はじめに

森田(1991)は、政令指定都市と東京区部の中学生を対象にした調査から、潜在的生徒も含めると、中学生の67.1%に不登校現象の広がりが見られたことを報告している。小中学校の年間30日以上欠席者や、公私立高校の中退者が各々10万人を越えたことが近年の文部省の学校基本調査で示されたが、欠席したり中退する以外にも、登校してはいるものの、遅刻群や潜在群など不登校気分につながる学校嫌い感情を持つグレーゾーンの生徒が相当数存在するというのである。

このような現状に対し、学校ができることとして、生徒の居場所作りを進めることが考えられる。藤岡(1993)は、「不登校になってしまう児童・生徒は学校に行っているものの、なんらかの違和感、何かそぐわない感じ、自分がある場所でないという感じを持っているのではあるまいか」といい、尾木(1996)は、「思春期のどの子にも『心の居場所』を保証することは、今日の学校と教師にとって緊急で最大の課題といえる」と述べている。伊藤(1998)は、対人経験の欠落を補い、青年期のアイデンティティを育むものとして「居場所」があり、例えば、保健室登校は保健室が学校内の数少ない「居場所」としての意味を担っているとし、居場所作りを「アイデンティティ形成を促す実践的アプローチとして注目したい」と述べている通りである。

このように、今日、学校における居場所作りの重要性が指摘されるようになってきたが、どのような場所を居場所というのかについて十分検討され、共通の認識がなされているとはいえないのが現状である。この点について、高校生を対象に調査を行った松田(1997)によれば、居場所とは、①ゆったり落ちついていられる「リラックスできる場所」、②自分の存在を認められ、力を発揮して「ハッスルできる場所」、③自分を振り返ったり、一人になれる「プライベートな場所」であるという。また、居場所の存在が、生徒の自己実現につながるとすれば、Maslow, A. H. が提唱した欲求階層説を援用して、①安全の欲求、②愛と所属の欲求、③承認と尊敬の欲求が満たされる場所であると考えられることもできる。実際、松田が示す居場所とMaslowに基づく居場所の構造は、概ね、

一致するといえよう。すなわち、「リラックスできる場所」や「プライベートな場所」は「安全欲求」や「愛と所属の欲求」が満たされる場所であると考えられるし、「ハッスルできる場所」は「承認と尊敬の欲求」が満たされる場所のイメージにつながる。但し、承認や尊敬は、他者から受け取るものであり、自分がハッスルできる場所というのもありそうである。今後、こうした知見や児童・生徒の調査などを踏まえながら、居場所の概念について、更には、居場所という呼び方についても、更に検討を加えていく必要があるだろうが、本研究においては、松田とMaslowの論を手がかりとして、居場所を、①安全欲求を満たせる場所、②愛と所属の欲求が満たされる場所、③承認と尊敬の欲求が満たされる場所、④ハッスルできる場所として想定する。また、居場所という言い方の他、心の居場所という言い方がなされることがあるように、居場所を、特定の空間を占める物理的な場所としてのみ規定するのではなく、ある種の場面や人間関係を含んだ概念として捉える考え方がある。例えば、鈴木(1995)は、中途退学指向性を持たない高校生は、教師からのサポートや信頼があったり、友達や親からのサポートを得ているが、中途退学指向性を持つ高校生は、対教師関係や対友人関係でストレスが高いことを報告している。この例は、教師や友人との人間関係を結べる、結べないということが、学校に居場所がある、ないということと深く関わっていることをよく示していると思われる。本研究でも、居場所を物理的な場所に限定せず、人間関係や活動場面も含んだ、包括的な概念として捉えておきたい。

本研究では、大学生の振り返り調査から、小学校から大学までの発達段階における居場所の実態を明らかにし、学校における居場所作りを構想するための基礎的知見を得ることを目的とした。小学校以降の学校場面で、発達段階に対応して、どんなところに居場所があり、それがどのように変化するのか、しないのかを調査し、学校の果たす役割について明らかにしようとしたのである。また、学校における居場所作りを検討したり、実践していく上で、居場所作りについてのすぐれた事例を収集することにも十分な意義があると考えられる。大学生を対象とした調査から、初等中等教育段階の学校における居場

所作りの事例を取り上げ、その心理・教育的意義を明らかにするものである。

2. 小学校から大学時代までの居場所

(1) 居場所の調査

関東地方の総合大学で、主として、体育学や芸術学を専攻する男女大学生115名（男子75名、女子40名）を対象に、平成11年8月に集団場面で以下の質問をし、回答用紙の回答欄に、自由記述での回答を求めた。

”あなたにとっての「保護された、安全に過ごせる」場所、「所属感がある、愛し愛される」場所、「尊敬されている、認められている」場所、「やる気が出る、力を発揮できる」場所はどこですか。小学校、中学校、高校、大学時代の具体的な場所や場面を回答して下さい”。

回想形式で、先に述べた4つの場所に対応させた居場所の回答を求めたものである。

(2) 学校における居場所作りの事例

先に述べたように、居場所とは、HR教室や部活動の部室やグラウンド、保健室や教育相談室などの物理的な場所も考えられるし、授業や特別活動等の活動場面、或いは、そこでの人間関係も含めた心理的居場所も考えられる。高柳（1999）は、中学、高校時代を振り返った大学生の生徒指導に対するポジティブな記憶として、「生徒指導室が開放され、先生と話し、悩みや不安が軽減した」という事例や、「先生とよく遊び、その中で悩みを解決できた」、「学級委員としての自分を先生が支えてくれた」といった事例を報告しているが、最初の例は、何でも話せ、受け入れられた記憶と共に想起される生徒指導室という物理的な場所が、居場所のイメージとなっており、後者は、どこか特定の場所というよりは、教師との人間関係が中学高校時代にあり、その結果、中学高校に居場所があったという記憶となっている例である。居場所として物理的な場所のを取り上げる場合も、実際は、そこでの人間関係や何らかの活動が切り離せないものであると考えられる。そこで、いずれの居場所をも含んだ包括的概念として居場所を取り上げ、大学生の調査から、居場所作りの参考となるような優れた実践を取り上げ、その意義や実現可能性について検討を加える。

具体的な調査方法としては、関東地方の総合大学で、主として、体育学や芸術学を専攻する男女大学生を対象として、平成12年9月に集団場面で「あなたが教師だとして、生徒の自己実現のためにどんなことをしたいか、具体的に述べよ」という質問を行い、それに対するレ

ポートの記述の中から、その学生が実際に経験した居場所体験を抽出することにした。その実際例をいくつか取り上げ、分析することとした。

3. 結果と考察

(1) 発達段階と居場所の関係

調査結果を、図1に示す。数値には、複数回答も含んでいる。また、明らかに学校の施設（教室、体育館等）とみなされる場所や、家庭内の場所（居間、自分の部屋）とみなされる場所は、学校、家庭に分類した。

1) 安全欲求を満たせる場所として、小学校から大学まで家庭を挙げた者が多い。いずれも80%以上の回答があった。マズローに従えば、より基底的と考えられるこの欲求を満足させる上で、家庭の果たす役割の大きさが示されたといえよう。中学校以降、家庭の中で自室の占める割合が、5.2%、7.8%と増えていき、大学生で40.0%と顕著になる。発達とともに、安全な場所として、プライベートな場所の占める割合が大きくなるとも考えられるし、大学生の場合、家庭に変わるものとして、自宅外に自室がある者が増えているという要因も考えられる。高校時代に1割を少し越えるが、他の発達段階において、学校を記述した者は1割以下であった。

2) 愛と所属の欲求が満たされる場所として、小学校時代には、家庭が58.3%と最も多いが、中学校で48.7%、高校で40%、大学で35.7%とその割合は減少していく。一方、学校を挙げる者は、小学校で34.8%であるが、中学校では家庭より多い51.3%であり、それ以降、家庭よりも回答数は多い。また、学校と重なる部分もあると考えられるが、友人など、その他の場所を回答する者も発達段階が進むにしたがって増え、大学では、17.4%になっている。中学校以降、家庭よりも、学校に所属感のある者が増えてくるといえよう。学校の中では、特に、部活動が居場所であると答える者が、中学校以降、過半数を占めている。こうした高い割合は、調査対象者のほとんどが、中学高校時代に部活動参加率が高いと考えられる体育、芸術専攻の学生であるという特性と関係が深いと考えられるが、そうであるにせよ、学校が所属感や、受容感と関わりの深いと考えられる愛の欲求を満たす場所として機能し得ることが示唆されると考えられる。

3) 承認と尊敬の欲求が満たされる場所として、いずれの発達段階においても、学校を挙げる者が多く、特に、中学、高校時代には、8割近くの者が学校と回答している。また、学校と回答した者の内、中学校以降は、クラブ・部活動を挙げる者が過半数を占めている。一方、大学では、その半数強の43.5%と減っている一方、この欲

求を満たされる場所がないと回答した者が31.3%と、かなり高い割合となっている。中学・高校時代に高い割合を示しているのは、愛と所属の欲求同様、現在、体育、芸術専攻の学生であるという特性と関係が深いと考えられる。すなわち、運動競技や芸術表現の面で、優れた評価を得ている者が多かったのではないかと考えられる。

その一方で、大学でこうした居場所がないと回答した者が多いのは、高校まではスポーツや芸術の分野で周囲から承認・尊敬されていた者が、同じ専攻の者が集まる、よりハイレベルな集団に所属するようになり、相対的に優位性が減少したことがあるのではないかと考えられる。
4) ハッスルできる場所も、承認と尊敬の欲求が満たさ

あなたの居場所

複数回答可 N=115

場所	小学校時代	中学校時代	高校時代	大学時代
安全に過ごす	家庭 93.0% 家族と一緒に 8.7% 学校 5.2% その他 3.5% なし 2.6%	家庭 87.8% 家族と一緒に 7.0%、自室 5.2% 学校 9.6% その他 2.6% なし 5.2%	家庭 80.0% 自室 7.8% 学校 12.2% その他 7.8% なし 5.2%	家庭 81.7% 実家 12.2%、自室 40.0% 学校 5.2% その他 10.4% 友人 8.7% なし 5.2%
愛し愛される	家庭 58.3% 学校 34.8% 友友 18.3%、部活 7.0% その他 7.8% 友人 7.0% なし 5.2%	家庭 48.7% 学校 51.3% 部活 27.0%、友友 18.3% その他 9.6% 友人 6.1% なし 5.2%	家庭 40.0% 家族と一緒に 5.2% 学校 52.7% 部活 36.5%、友友 12.2% その他 14.8% なし 3.5%	家庭 35.7% 実家 10.4% 学校 44.3% 部活 38.3% その他 17.4% 友人 16.5% なし 12.2%
認められている	家庭 15.7% 学校 59.1% 友友 17.4%、部活 12.2% その他 11.3% 地域 74% 97.8% なし 18.3%	家庭 12.2% 学校 77.4% 部活 49%、友友 11%、生徒会 5% その他 7.8% なし 13.0%	家庭 10.4% 学校 78.3% 部活 57.4%、友友 14.8% その他 7.8% なし 9.6%	家庭 8.7% 学校 43.5% 部活 33.9% その他 18.3% 友人 8.7%、70% 15.2% なし 31.3%
力を発揮できる	家庭 3.5% 学校 63.5% 部活 22.6%、授業 9.6%、友友 7% その他 33.9% 地域 74% 919.1% なし 7.8%	家庭 0% 学校 87.0% 部活 67%、授業 6%、運動場 8% その他 10.4% なし 5.2%	家庭 0.9% 学校 96.0% 部活 70.4%、授業 5.2% その他 13.3% なし 3.6%	家庭 1.7% 学校 77.4% 部活 64.3%、授業 6.1% その他 19.1% なし 8.7%

表 1 各発達段階と居場所の関係

れる場所同様、いずれの発達段階においても、学校と回答した者が多かった。特に、中学、高校、大学で、学校を挙げた者は、それぞれ87.0%、86.0%、77.4%と大多数を占めている。そのうちの8割前後が、具体的場面として、クラブ・部活動を挙げている。また、小学校では、33.9%の者が、地域スポーツ活動などの学校外でハッスルできる場所を持っていることが示された。中学、高校時代には学校外が1割程度となり、ハッスルできる場所が学校に収斂していく。大学では、再び、学校外にハッスルできる場を持つ者が増加し、2割程度となる。大学生になると、行動半径が広がり、専攻に関する諸活動やアルバイトなどの機会が増えることがその理由として挙げられよう。中学校、高校時代は、ハッスルできる場が学校に収斂しているといえ、学校における居場所作りの意義が強く認められよう。

全体的にみると、子どもが力を発揮したり、周囲から認められる場を提供するという点では、学校の果たす役割がかなり大きいことが示唆された。特に、中学・高校段階で、この特徴が強くみられるように思われる。また、今回の調査では、そうした場として、クラブ・部活動を回答する者が多かったが、体育学、芸術学専攻の学生が主たる調査対象であったことも影響していると考えられる。しかし、その他に、居場所として、クラスや授業、生徒会活動などを挙げた者もあり、調査対象の特性だけでなく、本人の興味や適性を生かす場を学校が用意している事例も少なくないことが示されたと考えられる。ただし、小中高校時代、成績や、運動、芸術分野で、高い達成度を示したと考えられる大学生が対象なので、その点を考慮する必要はあるのかもしれない。

また、安心や愛情を提供する点では、家庭の果たす役割が大きいことが示唆された。自由記述で回答を求めたので、学校に関する記述が少ないことが、直ちに、学校が安全に過ごせる、保護された場所でないということにはつながらないと思われる。この点については、更に検討することが必要であると考えられる。

(2) 居場所作りの事例

大学生のレポートに見られた、居場所作りの参考になりそうな事例を取り上げ、その意義について論じる。

① 交換日記を行った教師の例

ある学生は、中学3年生の時の担任との交換日記を行った記憶を書いている。担任の方から「みんなと交換日記がしたい」と言って、クラスの一人一人にノートを1冊づつ配り、交換日記を始めたという。「書く内容は何でもいい。その日学校であったこと、家でしたこと、

悩んでいること。特に書くことがなければ、何も書かずに出していい」と担任は言い、その学生がたくさんのことを書くと、毎日、赤ペンでぎっしりと返事を書いてくれたという。その学生にとっては、「先生からの応援メッセージをもらった感じ」がしたそうだが、同時に、同じクラスの何も熱中することがない子、今何をしていたかわからない子にとって、その学生が思う以上に大きな役割を果たしていたのではないかと書いている。

毎日、生徒の書いたものに目を通し、返事を書くことは、現実には、容易でないことが想像されるが、そのことを通して、担任は生徒に対する関わり方についての非言語的なメッセージを発することになり、また、コメントを通じて、自分の考えや体験などを自己開示することになる。このことが、生徒との心理的距離を近づけていくと考えられる。また、日記を書くことを通じて、生徒は、自由に自分を表現する経験を持ったり、返事を読んで、担任から受容されたり、共感される体験を通して、自己肯定感を高めていくことができると考えられる。その結果、生徒は、この担任のクラスに所属しているという感じを持ったり、担任から承認されているという感じを持つことができるであろう。日記がやり取りされる場が主として教室であったとすれば、この学生にとって、中学3年の教室は、担任との日記のやり取りに代表される人間関係の記憶が詰まった居場所であったといえよう。

このような日記や学級文集の利用と効用について、小学校の事例ではあるが、品田(1997)は「子どもは教師の受容的・共感的なコメントを通して教師の人間性を知り信頼関係を築くきっかけにもなる。また、心を開いて本音を語ってくれるので児童理解の手段にもなる」と述べている通り、本音の交流ができることも交換日記の優れた点だろう。この他にも、学級日誌や日常のレポート等提出物返却の際にコメントをつけて生徒に返却すると、それを読む生徒の姿をよく見かけるが、集団に対する一斉指導以外に、こうした個別指導の機会を設けることが、一人一人の居場所感獲得に効果がありそうである。

中学校時代の教師との間で、交換日記体験を持つこの学生は、もし、白紙で日記を出した生徒がいたら、「その子のその日の良かった点を書きたいと思う。掃除を頑張っていたとか、授業中一生懸命発表したなど、他の先生から聞いたことなどを含めて、どんな小さなことでもいいから、その子が次の日、またそのことに頑張ってみようと思えるような言葉で書きたい」と、また、将来何をしたいかわからないとメッセージを書いてきた生徒には、「自分が中学生の時、どんなことを考えていたかを

書きたいと思う。私自身、中学の時は、何になりたいかなんてははっきりわからなかった。けれど、何故今教師としてその子の前にいるのか。そのように『先生もいろいろ悩んできた』ということを生徒に知らせ、迷い悩みながら、少しずつ自分のやりたいことを見つけていけばいい、たとえそれが途中で駄目になったり、別のことがしたくなくてもいいから、人生は無限の可能性があるので、悩むだけ悩めばいいということを書きたいと思う」と書いている。中学校3年生の時の担任が今でもこの学生の心の中に生きている印象を受けるが、こうした教師との関係ができていれば、そこは、通い甲斐のある居場所ということになるのではないか。

別の学生も、「あのねノート」という、先生あのねと書き出して、その日あったことや、相談事を記載するノートのことを書いている。その学生は、将来の希望について明言すると、周りからいい子ぶっていると、勉強の自慢のように聞こえそうで怖かったそうだが、そのノートを利用して個人的に相談ができたという。もし、こうしたノートがなければ、この学生は、自分の気持ちを素直に表現する機会が十分持てなかったかも知れない。このノートがあることで、気兼ねせず、自分の気持ちを表現できる居場所があったともいえよう。

② 生徒にHR活動の企画・運営をさせる例

ある学生は、高校時代、隣のクラスの担任がやっていた事例として、生徒がHRの企画・運営をする事例を書いている。はじめに5、6人でグループを作り、週1回のHRの時間に企画を作りクラスがその企画をするというものである。「この企画は体育館でドッジボールでもいいし、家庭科室を借りて料理教室をしたり、外に出かけてピクニックでもいい。だが、その計画、場所設定、運営はすべて（生徒ができる範囲で）グループが責任を持つことにする。この目的の1つには企画運営ということを学ぶことがある。確かにこれは生徒にとって面倒なことかも知れない。だが、社会に出ると必ず人と少なからず交渉をしなければならぬ。また、2つめには新しいことに挑戦するきっかけになることだ。企画をすることで1クラスを動かす大変さを克服することによって自身がつくだろう。ほかのグループの企画に参加することにより新たな興味が出るかもしれない」と述べているが、こうした企画・運営をすることで、生徒は、ここが自分のクラスだという所属感を強めたり、他の生徒が、自分たちの企画で楽しむことになれば、承認や尊敬欲求が満たされる経験となり得ると考えられる。自分達のできる範囲で企画するという自己決定の機会や、それを運営す

る過程で、自己表現の機会が用意されるハッスルできる場でもあり、それがクラスの他の構成員に受け容れられる経験を持つことで、自己効力感や自尊感情が育つ契機ともなり得ると思われる。「隣のクラスの友人が楽しそうにHRの話しをしているのに対し、私たちはつまらない先生の話しを聞かされて（先生に対して失礼だが）みんな寝ていた。せっかくの勉強以外の時間にも関わらず教科以上につまらないことをされたら、ただでさえ勉強が嫌な生徒は学校にも来なくなるのではないだろうか」とこの学生は書いているが、HRで受け身的に話しを聞くだけであるこの学生のHRに比べ、教師主導型でなく、しかし、生徒ができる範囲でという但し書きが付くように、決して放任でなく、生徒が活躍する場が用意されている隣のクラスのHRは、そこに所属する生徒の居場所となっていると考えられる。

また、こうした非日常的な活動が取り入れられる柔軟さも居心地のよい居場所の要件かも知れない。別の学生も、HRでレクリエーションを行ったり、近くの河原へ行き、焼き芋をしたりした経験をつづっているが、「そのような時には普段教室の中ではできない世間話などを担任としてとても楽しかった」と書いている。本音の交流ができる場が居場所ということにもなる。

同様の事例として、小学校時代に、学級でいろいろな役割を経験する機会が設けられていたことを書いた学生もいる。「例えば、学級図書を整理する係、連絡事項をクラス内に伝達する係、各教科の準備等を手伝う係など、先ず興味を示すための機会を拒まないためか、希望する係をすることができた。しかし、一定の期間はその係で頑張らなければならなかったのも事実である。私はよく新聞係をしていた。毎日帰りの会で、新聞記事の一記事を抜粋し、その内容を紹介する係だった。何よりも新しいことを知ろうとする気持ちが生まれ、自分が知ったことを人に伝えることがうれしかったらしく、飽きもせずのにのめり込んでいた」と述べているが、それぞれの子どもが自分のやりたいことを引き受け、しかし、一定期間は、その仕事をやり続ける経験を持てる場が用意されている。この学生は、その経験を通して、新聞係にのめり込むほど引き込まれている。ハッスルできる居場所であったということであろう。

これらの事例に共通するのは、活動の大きな枠組みは設定されているものの、生徒が自己選択、自己決定をしつつ、自分を表現することができる仕掛が用意されているということである。どの生徒も活躍し、主役になり得る機会が用意されていることが、居場所感につながって

いると考えられる。実際は、教師のサポートや、HR等構成集団の雰囲気等も影響すると思われ、同じ様な仕掛が常に同様の効果を示せるとは限らないが、ハッスルできる活動を用意する上で、参考になる点も少なくない。

4. おわりに

最近、学校に登校する要因に関する研究が行われるようになってきたように、今日の学校が、そこに通う児童・生徒にとって、必ずしも通学する甲斐のある場所ではなくてきていることが考えられる。しかし、学校は、教師や非常勤講師、社会人講師、事務職員をはじめとする教育の専門家や生徒のモデルとなり得る人的資源や、様々な教室、図書館、運動施設、農場などの施設やそこに附属する設備といった物的資源を有し、また、同年齢、異年齢の学習集団を構成し得る、大きな役割や可能性を持った教育の場である。生徒の自己実現を支援するために、学校に居場所を作ることが課題となろう。

本研究では、学校における居場所作りについて考察してきたわけだが、実際には、「まず居場所ありき」で居場所を作るというよりも、何がしかの人間関係や、自分が打ち込めたり、周囲から承認されるような活動のできる場があることで、そこが居場所として認知されるということになるのではないと思われる。

学校の在り方が問われているけれども、学校に居場所を見つけている者も相当数おり、また、授業や特別活動など、様々な場面を生かした居場所作りが可能であると考えられる。学生のレポートにも示されているように、居場所を持っている学生は、生き方・在り方の核の部分に、そこでの肯定的な記憶が生き続けているという印象を受ける。居場所という言い方は、ある意味では、漠然とし過ぎていて厳密さに欠けるともいえようが、これからの学校が指向していく一つの方向性を示す言葉として、わかりやすいという利点もある。本研究で取り上げた事例は、優れた実践であると思われ、今後も、こうした居場所作りの実践事例を収集したいと考えているが、同時に、これらの実践を行っている教師の姿勢から学びつつ、自分ができることを考え、居場所作りの実践に取り組みたいと考えている。現在のところ、農業体験学習を活用した居場所作りについて、いくつかの実践や立案を行っているが、その点については、稿を改めて、報告したい。

尚、本研究の一部は、日本教育心理学会第42回総会で発表を行った。また、レポートを引用させて戴いた学生諸君に感謝の意を表す。

参考・引用文献

- 藤岡孝志 1993 不登校・登校拒否の指導 寺田晃・佐藤怜監修小野直広編『生徒指導』 p.148 中央法規
- 伊藤研一 1998 アイデンティティ問題とカウンセリング 岡堂哲雄編『スクールカウンセリング』 pp.112-113 新曜社
- 松田孝志 1997 現代高校生における居場所の内包的な構造 筑波大学大学院教育研究科修士論文抄録集 pp.31-32 筑波大学大学院教育研究科の雑誌専攻
- 森田洋司 1991 『「不登校」現象の社会学』 学文社
- 尾木直樹 1996 子どもたちの「心の居場所」を創る 下村哲夫 『シリーズ現代の教育課題に挑む第5巻 いじめ・不登校』 p.97 ぎょうせい
- 品田笑子 1997 学校における教育相談—教師の使えるカウンセリング—教師としてこのようにカウンセリングを活用している カウンセリング研究 第30巻1号 p.73 日本カウンセリング学会
- 鈴木敏城 1995 高校生の中途退学指向性の研究 筑波大学大学院教育研究科修士論文抄録集 p.26 筑波大学大学院教育研究科の雑誌専攻
- 高柳真人 1999 大学生による「生徒指導」の記憶と評価について 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要第37集 p.53 筑波大学附属坂戸高等学校
- 高柳真人 2000 児童・青年期における発達段階と居場所の関係 日本教育心理学会第42回総会発表論文集 p.640 日本教育心理学会